

蜘蛛丝

芥川龙之介

(翻译 陈焰)

一

一天，释迦佛祖正独自绕着极乐莲花池踱步，莲花池里绽开的莲花朵朵洁白如玉，正中的金色花蕊溢出阵阵不可言喻的沁人芳香，这大概就是极乐世界的清晨吧。

不久，释迦佛祖便伫立在莲花池旁，通过遮盖着水面的莲叶与莲叶间的间缝蓦然凝视着水下的情景，极乐莲花池的底下刚好就是地狱的底层，透过如同水晶般清澈的水，看三途河和刀山的景色，就好像看透视镜般的清晰。

收入眼底的是这地狱的底层有个名叫犍陀多的男人和其他罪人在蠕动的踪影。就是这个名叫犍陀多的男人曾杀人放火无恶不作，还是一个大盗。

尽管是这样，释迦佛祖还记得他曾经做过的唯一一件善事：一次，穿行在深山老林的这个男人，看到一只小蜘蛛在路边攀爬，他不假思索的抬起脚欲将小蜘蛛踩死，这时候“不行，不行，这小东西虽小，却也是一条性命，如此轻率的要了它的命，怎么说也是太可怜了”。他突然转意，放过了这只小蜘蛛。

释迦佛祖在俯视地狱的同时记忆起了犍陀多将小蜘蛛放生的这件事，并且还在想：看在他毕竟做过一件善事的份上，如有可能，倒不如把他从地狱里拯救出来。

所幸的是，一看侧面正有一只极乐蜘蛛在翡翠色的荷叶上拉着美丽的银丝，佛祖的手轻轻将那条蜘蛛丝提了起来，这样这条银丝便从如玉般冰洁的白莲间笔直笔直地遥遥地向着地狱的底层垂下去了。

二

这里是在地狱底层的血池，犍陀多和其他的罪人一起在里面忽沉忽浮。无论从哪个角度看，下面都是漆黑漆黑的，偶尔从黑暗中隐隐约约地往上浮出来的也只是令人胆战心惊得刀山的刀尖闪光，并且周围也如同墓地般的一片死寂。偶尔听得到的也就只有那些罪人们的微弱的叹息声。这大概是因为落入到这里的人们，都早已被种种地狱之苦折磨得精疲力尽，甚至连哭泣的气力也都仅存无几了的缘故吧。

正因为这样，就连堪称大盗的犍陀多也不例外地被血池中的血呛噎得喘不出起来，像濒临死亡的青蛙，只是在作垂死挣扎罢了。

不过，就在某一个时刻事情发生了，无意间抬起头向上张望的犍陀多发现血池上空静静的不正有一条细细亮亮的蜘蛛丝在黑暗中从遥不可及的上方速速向自己垂过来吗？

犍陀多不由得欣喜若狂，拍手称好。只要抓住这条蜘蛛丝不管向哪儿攀援，都一定可以逃脱地狱，不，如果顺利，说不定进入极乐世界也是完全有望的。

果真这样的话，那自己岂不是既不用被赶往刀山，也不会被投沉血池。

犍陀多没容自己多想，便两手迅速牢牢抓住了这条蜘蛛丝，拚着命地攀援，向上，向上、再向上。

这种事情对于原来就是大盗的犍陀多来说，按理根本不是一件难事。

但是，地狱和极乐世界之间不知相距几万里，再怎么焦躁也还是不能轻易爬得上去，爬了不一会儿，犍陀多终于感觉累了，连再爬一点点的气力都使不出来了。无奈，只好作了稍稍歇息的打算，悬在蜘蛛丝的中间远远地向下面望去。

于是，终于明白刚才那段拼命不是徒劳。

因为自己一直呆到今日的那个血池不知不觉已隐没在黑洞洞的底

部，另外那闪着微光的恐怖的刀山也已置于自己的脚下。照此继续向上攀援，意外的就能很容易地脱离地狱也说不定，犍陀多双手紧握蜘蛛丝，发出了来此地以后多少年来都未曾有过的笑声：“好极了！好极了！”谁曾想他突然注意到，蜘蛛丝的下方有无数的罪人都跟在自己后面像一列蚂蚁队一样他们也在不停地攀援，向上，一心向上。

此时的犍陀多既惊又怕，一时间竟像个傻子只会呆呆地张大着嘴巴，只有眼珠子在转动。光自己一人爬就有可能招架不住的这条蜘蛛丝怎么能够承受得了那么多人的重量，万一中途蜘蛛丝断了，好容易已爬到此地的至关重要的自己必定会头朝下坠下去回到原来的地狱。

果真如此，岂不前功尽弃。与此同时，何止几百几千的罪人还在从漆黑一团的血池中咕容蠕动着向上爬：他们自成一列在细细亮亮的蜘蛛丝上使劲攀登。蜘蛛丝定会从当中断开，自己便会随之坠入下去，事不宜迟。

就这样，犍陀多便大声喊道：“喂，罪人们，这蜘蛛丝可是我的，你们究竟问过谁了就这么往上爬，下去！快下去！”

这时候，直至刚才还好好的蜘蛛丝突然从犍陀多的悬吊之处随着“啪”一声响，断了。

犍陀多难以措手，瞬间像只陀螺迎风打转转，看着看着就一头坠落到了漆黑无比的底层。

只留下那根短短的极乐蜘蛛丝还悬垂在没有星月的天空中，闪烁着微细的光。

三

不久犍陀多便石头般沉入了血池，释迦佛祖站在极乐莲花池的池边，这一切自始至终都看到了，脸露悲伤，便又慢慢踱起步来。

一心只想着自己脱离地狱的没有丁点慈悲心的犍陀多理应受到相应的惩罚，坠回本来属于他的地狱。在释迦佛祖看来，他是何等的卑

微。

对于发生的这一切，极乐莲花池的莲花却丝毫没有在意，如玉般洁白的花朵依然在释迦佛祖脚边随风轻轻飘摇，正中的金色花蕊仍溢出阵阵的沁人芳香。

此时的极乐世界已近正午了。



(日本語原文) ^{くも}蜘蛛の糸 芥川龍之介

—

ある日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、ひとりでぶらぶら御歩きになっていらっしゃいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色の蕊ずいからは、何ともいえない好い匂いが、絶え間なくあたりへ溢れております。極楽はちょうど朝なのでございましょう。

やがて御釈迦様はその池のふちに御おたず佇みになって、水の面をおおっている蓮の葉の間から、ふと下のようすを御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、ちょうど地獄の底に当たっておりますから、水晶のような水を透きとおして、三途さんずの河や針の山の景色が、丁度のぞ覗き眼鏡を見るように、はっきりと見えるのでございます。

するとその地獄の底に、^{かんだた}犍陀多という男が一人、ほかの罪人と一しょに蠢うごめいている姿が、御眼に止まりました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大どろぼうでございますが、それでもたった一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這って行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、「いや、いや、これも小さいながら、命のあるもの

に違いない。その命を無暗^{むやみ}にとると云う事は、いくら何でもかわいそう
だ。」と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやっ
たからでございます。

御釈迦様は地獄のようすを御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助
けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事を
した報いには、できるなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考え
になりました。幸いそばを見ますと、翡翠^{ひすい}のような色をした蓮の葉の上に、
極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘
蛛の糸をそっと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、はるか
下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました。

二

こちらは地獄の底の血の池で、ほかの罪人と一しょに、浮いたり沈んだ
りしていたのでございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそ
のくら暗からぼんやり浮き上っているものがあると思いますとそれは恐
しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さといったらござい
ません。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返って、たまに聞え
るものといっは、ただ罪人がつくかすかな嘆息ばかりでございます。こ
れはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦に疲れは
てて、泣声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさ
すが大どろぼうの犍陀多も、やはり血の池の血に咽^{むせ}びながら、まるで死に
かかった蛙^{かわず}のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時の事でございます。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の
池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、
銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光
りながら、するすると自分の上へ垂れて参るのではございせんか。犍陀
多はこれを見ると、思わず手を打って喜びました。この糸にすがりついて、
どこまでものぼって行けば、きっと地獄からぬけ出せるのに相違ございま

せん。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえもできましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もあるはずはございません。

こう思いましたからは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大どろぼうの事でございますから、こういう事には昔から、慣れ切っているのです。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦って見た所で、容易に上へは出られません。ややしばらくのぼる中に、とうとう韃陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなりました。そこで仕方がございませんから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下りながら、遥かに目の下を見下しました。

すると、一生懸命にのぼったかいがあつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれております。それからあのぼんやり光っている恐しい針の山も、足の下になってしまいました。この分でのぼって行けば、地獄からぬけ出すのも、存外わけがないかも知れません。韃陀多は両手を蜘蛛の糸にからみながら、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた。」と笑いました。ところがふと気がつきますと、蜘蛛の糸の下の方には、数限りもない罪人たちが、自分ののぼった後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼって来るではございませんか。韃陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで、しばらくはただ、ばかのように大きな口を開いたまま、目ばかり動かして居りました。自分一人でさえ切れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事ができましょう。もし万一途中で切れたといたしましたら、せつかくここまでのぼって来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら大変でございます。が、そういう中にも、罪人たちは

何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上って、細く光っている蜘蛛の糸を一行になりながら、せつせとのぼって参ります。今の中にどうかしなければ、糸はまん中から二つに切れて、落ちてしまうのに違いありません。そこで犍陀多は大きな声を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の糸はおれのものだぞ。お前たちは一体誰に聞いていてのぼって来た。下りろ。下りろ」とわめきました。

そのとたんでございます。今まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下っている所から、ぷつりと音を立てて切れました。ですから犍陀多もたまりません。あっと云う間もなく風を切って、^{こま}独楽のようにくるまわりながら、見る見るうちに暗の底へ、まっさかさまに落ちてしまいました。後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでございます。

三

御釈迦様は極楽の蓮池のふちに立って、この一部始終をじっと見ていらっしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしまいますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御目から見ると、あさましく思し召されたのでございましょう。

しかし極楽の蓮池の蓮は少しもそんな事には頓着^{とんじゃく}致しません。その玉のような白い花は、御釈迦様の御足のまわりにゆらゆら^{うてな}萼を動かして、そのまん中にある金色の蕊^{ずい}からは、何とも云えない好い匂いが絶え間なくあたりへ溢れております。極楽ももう昼に近くなったのでございましょう。

.....

本文テキストは青空文庫（日本ペンクラブ電子文藝館編輯室）よりダウンロードし、歴史的かなづかいを現代かなづかいに改めたものです。